

### Ⅲ 教育山形「さんさん」プランの各施策について

#### 1 各学校の実践事例

## 教育マイスター制度 小学校：退職教員活用型 深い児童理解に基づいた学力向上をめざして

### 新庄市立新庄小学校

#### 1 本校の状況

##### (1) 学校の実態

本校は、全校児童数422名、学級数18で「あいさつと歌声の響く明るく美しく花開く学校」をスローガンとして「よく考えて進んで勉強する子」「素直で明るく思いやりのある子」「がんばりぬくたくましい子」をめざす子ども像としている。平成27年度から県の「探究型学習推進プロジェクト事業」推進校・新庄市教育委員会委嘱校として校内研究の充実はもちろん、日々の授業改善に努めている。

##### (2) 本事業の運用のねらい

主体的な姿を引き出す「探究型学習の授業」の実践、若手教員の授業力向上、児童理解を踏まえた個々の学習支援の推進、評価についての取組の充実等を図っていく。そして、NRTや全国学力・学習状況調査等における数値目標の達成や授業改善を通じた学力向上につなげていく。

#### 2 実践の内容

##### (1) 授業を参観し、授業者と振り返りながらの研修

4月から5月にかけて、指導力と児童理解のために、全クラスの授業参観を行った。6月からは、特に若手（新採6年以下）の授業を参観し、気付いたことを助言したり、授業者と授業を振り返ったりしての研修を行った。

##### (2) 授業づくりのポイントについて検討し、TT等による協働の授業実践

特に、算数の個人差が目立つ5年生や新採2年目の若手が担任している2年生を中心に行った。2年生はTTを基本に、5年生は学習効果を考えて単元や授業内容によってTTや取り出しを行った。複数の目で授業改善について考えたり、理解の遅い子等へ対応したりすることができた。

##### (3) 示範授業を実施し、それを参観しての研修

2年生担任と特別支援学級担任の新採2年目の若手を対象に行った。特に特別支援学級担任は今年度初めての経験であったために、不安を抱えていたので、登校から下校までの対応について指導した。児童の実態を踏まえた授業づくりはもちろん、授業を支える児童理解や学級づくり等についても一緒に考えることができた。通常学級にも、特別な配慮を要する児童や家庭に問題を抱えている児童が多い。子ども同士のトラブルや保護者対応等、日常的に起こる様々な問題に対しても、担任に寄り添いながら、改善に向けて対応することができた。

##### (4) 各種学力テストの分析・考察

平成27年度実施の県探究型テスト（試行）の結果を分析した。誤答を分析して今後に向けての対応をまとめた資料を、日頃の授業に活かしてもらえるように4年生以上の担任に配付した。

また、4月実施の平成28年度全国学力・学習状況調査終了後、前年度課題が見られた算数A問題を自己採点した。誤答を分析し今後に向けての対応をまとめた資料を

5年生と6年生担任に配付し、日頃の指導に活かしてもらえるようにした。さらに、全国学力・学習状況調査の結果が届くと、算数A・B問題や国語A・B問題について、領域、評価の観点、問題形式について県や全国との差を調べた。そして、落ちている設問を拾いだし、誤答を分析し今後に向けての対策を考えた。分析の結果、国語・算数ともにA問題に比べ、B問題が上回っていて、国語の書く力や読む力が伸びてきていることや、算数の数と計算、複数の条件から必要な情報を選ぶ問題に課題があることが分かった。この資料は全担任に配付し、本校の児童の実態を把握してもらい、指導に活かしていけるようにした。

### (5) 単元末評価テストの作成

#### 《4年「面積」の単元末評価テスト》

児童の実態に基づいた付けたい力を考え、4年生以上の算数の単元末評価テストを作成した。平成19年度から実施された全国学力・学習状況調査や県教育委員会から出されたスパイスシートの内容を参考にして作成した。5年生の単元末テストはほぼ全単元作成することができた。

各担任からは、単元末評価テストがあることで、その単元で付けなければならない力が明確になり、単元構成や日々の指導に活かしていけるという感想があった。

## 3 成果と課題

### (1) 成果

若手教員の悩みに寄り添いながら解決に向けて一緒に考え、対応することができた。授業の土台となる学級づくりや児童理解、及び保護者対応等についても一緒に考え、解決に向けて対応できたことは成果があったと思う。教科では、単元末評価テストの作成なども含め、主に算数を中心に学力向上に取り組むことができた。算数は、系統性を大切にして積み上げていくという点から課題が分かりやすく成果も見えやすいと感じた。

### (2) 課題

算数の単元末評価テストは、実施した後で担任の意見を聞きながら加筆修正したい。また、各種学力テストの分析や考察を参考に、児童の実態に基づいた学力向上につながる内容に改善していきたい。4年生と6年生の単元末評価テストは、今年度でできなかった単元末評価テストを作成し、さらに増やしていきたい。

深い児童理解や、主体的な姿を引き出す「探究型学習の授業」の実践については、共に学ぶ姿勢を大切に、日々の授業改善や学力向上につなげていきたい。

# 教育マイスター制度 小学校：退職教員活用型 学びの質を高める授業力・担任力の育成

高島町立糠野目小学校

## 1 本校の状況

### (1) 学校の実態

本校は、児童数380名、学年2～3学級、特別支援学級2学級、言語通級指導教室が設置されている学校である。

食育、読書活動に力を入れ、体験を通した学びと地域とのつながりを大切にした教育を進めている。

担任15名中約半数が若手教員であるため、それぞれの担任力を育成することが児童の健全な成長に大きく関わってくる。ベテラン教師が持つ専門性・指導性等の教育的資源の継承を進めている。



### (2) 本事業の運用のねらい

- ・教師が自信をもって授業に臨み、授業が楽しいと思える児童を増やす。
- ・担任力を高め、一人ひとりの児童が自己肯定感を持てるようにする。
- ・友達と主体的に関わり合っって学ぶことを楽しいと思える児童を増やす。
- ・学力を前年度比1ポイント以上向上させる。

## 2 実践の内容

### (1) 若手教員の授業づくり・学級づくりに寄り添う「身近な相談役」

- ・日々の授業づくりや学級経営についてアドバイスを  
行うだけでなく、若手教員の悩みを聞いたり、相談  
を受けたりしながら、その都度、適切なアドバイ  
スを行った。
- ・各学級の授業にTTとして入ったり、示範授業をし  
たりしながら共に授業改善を進めるとともに、授業  
後や休み時間に担任と「授業の振り返り」を行い、  
授業づくりについて細やかに指導している。
- ・発問や指示の吟味、板書計画、発言のさせ方、1時  
間の授業の流し方など細かに指導した結果、担任が自信を持って授業に向き合うこ  
とができるようになってきた。
- ・若手教員は、真剣に教育マイスターの話聞き、メモし、自己の授業改善に向けて  
意欲的な姿勢が見られた。



### (2) 学力向上につなぐ「次の一手」としての指導助言

#### ① 「授業自己評価カード」の活用

自己の授業を振り返る指標を全職員に配付し、共通理解を図ったことで、常に授業の基本を自己チェックすることができるようになった。

#### ② 「個別学習会」の実施

学力充実期間を定期的に設定し、個々の児童の基礎

本時を振り返ってみましょう

主なチェック項目	
1	時刻どおりに始める(あいさつ3秒で、目と目を合わせ)
2	机上整理(机の隅隅注意)姿勢のチェック(手・足・背中)
3	学習意欲を喚起し、考えや見識を持たせる課題提示
4	めあてを知らせ、板書 ノートやプリント
5	問題を全員で読み、書く ノートやプリント
6	解決の見直しを持たせる(既習との違いや共通点)
7	自分なりの方法で解かせる(図・式・言葉)ノートやプリント
8	板書整理、発表の組み立てを考える(9)につなげる課題の指名)
9	3/Aや低(の子で客先の理解をより深いを夏つたけりさせる
10	全体の場で意見を出させ、交流する一貫的、物象的な板書
11	切り直し、ゆえぶりの魚問などして確かなものとする
12	学習のまとめをするノートやプリント
13	課題問題を解かせ、自信を持たせるノートやプリント

学力アップを目指して担外も含めて重点的に指導してきた。児童は、授業だけで身に付かなかつたことや理解が不十分だったことが理解できるようになり、「できた」「わかった」ことへの喜びを実感する姿が見られた。

### ③「学年別計算テスト」の作成実施

7月、10月、12月、2月、3月に「学年別計算テスト」を実施した。学年毎にその時期までに定着すべき内容をテストし、全員が合格できるまで全職員で指導した。形成的評価により、児童は、次の学習に意欲的に取り組めるようになった。

### ④「時季に応じた授業づくり・学級づくり策」の提案

年間途中の節目の時季に、今児童に指導すべきことを整理して示し、学校全体で取り組むことができた。例えば、1月末に「残り35日でなすべきこと」などを配付し、進級・進学前までに徹底しておくことなどの共通理解を図ることができた。

## (3) 学力テスト結果から導き出した「重点指導事項」

各教科の領域ごとに成果と課題を分析し、学年毎に授業での重点指導事項を明らかにして取り組むことができた。職員会議や校内研究会等で、授業づくりについて教育マイスターから指導を受ける時間を取り、共通実践項目を設定することができた。

## 3 成果と課題

### (1) 成果

①若手教師の授業で児童の発言が増えてきており、課題に集中する姿が出てきた。さらに学級が落ち着いてきていること、歌声が響くようになってきていることなど、授業が変わると学級の雰囲気も変わることが明らかになった。

②校内研究会での若手の発言が増えてきている。自己の授業に自信を持ってきていること、授業づくりのポイントを自覚してきていることなどの証である。

③1月に実施したCRTにおいて、マイスターが重点的に算数の授業に入った全ての学年の正答率が、全国比で最大8ポイント上回った。昨年度との比較からも学力の向上が見られる。



### (2) 課題

教育マイスターが各担任に指導する時間、また、マイスター本人が授業を準備したり、研修を企画したりするための時間を、校内体制としてどう確保していくかが課題である。

今後は、指導や打合せ等の持ち方を工夫し、校内OJTの更なる充実を目指していきたい。

## 1 本校の状況

### (1) 学校の実態

本校は寒河江市街地の郊外に位置し、全校生徒281人の中規模の学校である。本校には様々な課題があるが、中でも学力向上は急を要する課題と受け止め、全教職員をあげて授業改善に取り組んでいる。校内研究を軸に取り組んでいたが、授業改善の日常化が大きな課題となっていた。

### (2) 本事業の運用のねらい

本校では、今年度“教育山形「さんさん」プラン”に係る教育マイスター制度を活用したOJTを進めている。教育マイスターには2名の中堅教諭を据えて、日常的なOJTの計画・実施を進めている。主な取組について下記のように明確にした。

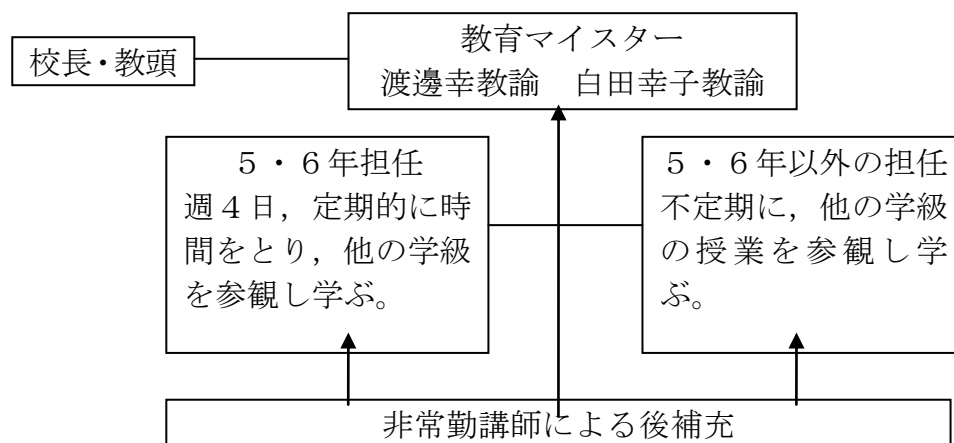
#### ①本校におけるねらい

- ・教育マイスターを中心に授業を開き、教員の資質や指導技術を高める。

#### ②教育マイスターの業務

- ・授業を開くために、どの教員がどの教員の授業を見に行くか、また、その後の授業改善の共有のための手立てをどうするか、コーディネートする。
- ・教育マイスター本人の授業を公開して授業改善の手立てを示していく。
- ・教育マイスターが他の先生の授業を参観し、授業改善のアドバイスをを行う。

#### ③校内体制



- ・後補充の非常勤講師が入ることにより、5・6年担任が週に4時間、他の学級を見る時間を確保する。
- ・1年～4年の担任については、教育マイスターがコーディネートして不定期に授業を見る時間を確保する。
- ・教育マイスターが上記の業務を行うために学級を空けた場合の後補充。及び、校外で研修を受ける場合の後補充。本校は2名の教育マイスターを指名しているので、2人が、相談する時間も意図的に設けている。

## 2 実践の内容

### (1) 3年1組の授業

11月11日(金)の1時間目がOJTの時間になっており、教育マイスターである白田教諭の授業を千葉教諭が参観した。

この授業をコーディネートしているのは、もう一人の教育マイスターでOJT担当の、渡邊教諭である。渡邊教諭は下記のような授業参観シートを準備して、朝のうちに全担任に配付する。

各担任は、授業の全部を参観できるわけではないが、時間をつくって3年1組の授業を参観する。その日は管理職も含めて4人が参観に訪れ、授業について学んだ。参観者は授業参観シート1枚を持って授業を参観し、気づいたことや学んだことを書き込んでいく。

この日の国語の授業は「食べ物へん身ブック」の組み立て方を考える授業だった。課題に迫るために教師が準備した例文が秀逸で、子どもたちが身を乗り出して黒板を見つめ、自分の意見を発表していた。「やってみたい」「ぼくも書いてみたい」という意欲が、学級中にあふれていた。その後「へん身ブック」を書く活動に入っていったが、子ども達は集中して書いていた。

### (2) 振り返り

参観者は授業参観シートをOJT担当に渡す。OJT担当は授業参観シートを使って、放課後に振り返りを行う。授業で学んだことや新たな気づき、アドバイスを行っていく。



授業参観シート		参観者(教頭)	
授業日・時間	教科	学年・学級	授業者
//月//日/校時	国語	3年/組	白田 幸子
単元名	食べ物へん身ブックをつくらう		
本時の目標	食べ物へん身ブックの「中」の構成を、てきあがるまでの目標を元に考えることができる。		
本時の流れ	気づいたこと		
1 課題の確認	食べ物へん身ブックの「中」の組み立てを考えた		
2 課題に取り組み	中国 中国 中国 → 何かが「何」か 1.じっくり考えて、あと少しを2.考えてみる。 ↓ 時間をきかんと しっかりやってみて考えてみる。 3.つけたしをせんか。の間にたたく。 ↓ しっかりやってみて、 4.実際にやってみる。子どもは目をキラキラ!! ↓ 動作化 5.自分で書く時に、 やり方をしっかり把握させてやる。 ↓ 学級の多い授業をした。 ありがとうございました。		
3 交流			
4 まとめ			
5 振り返り			

## 3 成果と課題

今年度からの取組であり、試行錯誤を繰り返しながらの実施になったが、以下のような成果と課題が明らかになった。

### (1) 成果

- ・50代教師が約半数を占めるが、40代のマイスター2名が相談を重ねながらOJTを推進していることに刺激を受けて、授業改善の気運が高まった。
- ・放課後などに振り返りを行うため、授業改善に対して当事者意識が高まり、授業づくりに関する話題が増えた。
- ・マイスターや担任がOJTのために学級を空ける際、後補充の人的配置があるため機能しやすかった。

### (2) 課題

- ・5・6年生は後補充があるために計画的にOJTができるが、1～4年の後補充がない学級については、計画的にスケジュールを組むのが難しかった。
- ・マイスターのスケジュール管理が煩雑で、調整が難しかった。
- ・校内研究に関わる授業研究会とOJTとの接点が必ずしも明確になっていない。

**教育マイスター制度 小学校：OJT支援員型**  
**“明るく かしこく たくましい” 子どもの育成**  
**最上町立大堀小学校**

## 1 本校の状況

### (1) 学校の実態

本校は、全学年単級の通常学級と特別支援学級2学級（知的、情緒）の8学級編制である。ヤギの飼育を通じた命の学びや、あいさつと「ぼかぼか言葉」の実践による心を育む教育活動を展開するとともに、特別に支援や配慮の必要な児童がいることから、ユニバーサル・デザイン（UD）の考え方をベースに、わかる・できるを実感できる国語科・算数科の指導法の工夫による「自ら学び、高め合う子どもの育成」を研究主題に掲げ、授業づくりに取り組んでいる。

### (2) 本事業の運用のねらい

“教育山形「さんさん」プラン”における各施策のうち、OJT支援員型の適用を受け、非常勤講師を配置いただいた。事業趣旨を踏まえ、下記の4点のねらいを掲げ、実効性のあるものにすべく、共通理解を図りその運用に努めてきた。

- ① OJTの活性化・充実の核となる人材（教育マイスター）の資質向上を図る。
- ②教育マイスターの命課と校内研究担当の分掌を連動させ、研修成果の還元で校内研究を推進させる。
- ③教育マイスターが担任する1学年に、副担任としてOJT支援員を配置し、小一ギャップを予防し、学びの基本を身につけさせ、学校生活に適応させる。
- ④担任とOJT支援員が少人数指導することで、4年生算数科の習熟度を高める。

## 2 実践の内容

### (1) 教育マイスターによるOJTの活性化

OJTの活性化・充実の核となる人材の資質向上を図るため、教育マイスターは校外研修（義務教育課主催：ベーシック研修会2回、教育事務所主催：もがみ授業づくりワークショップ2回、子どもの育ちと学びをつなぐ研修会、学習指導力向上研修会）にすべて参加した。教育マイスターは音楽指導を得意としているが、学習指導や学力向上、授業づくり全般に関わった系統的・計画的な研修の機会を得ることができた。

### (2) 校内研究の推進

教育マイスターとともに、学力向上担当と併せて研究副主任も命課したことで、研究主任と分担・協力して授業研究における指導案検討会や事後のワークショップに臨んでいる。研究主任が上学年を、副主任が下学年を担当することで、研究内容に深く関わるようになり、また、参加した研修内容の還元も怠りなく行われた。

### (3) 1年生の副担任としての指導

教育マイスターが担任する1年生は、保育所段階における巡回相談で、配慮を要する子どもとして注視される人数がとても多い集団であった。その集団に様々なルールを身につけさせ、安定した関係づくりを進め、学校生活に適応させなければならないことから、指導経験豊富なベテランのOJT支援員を学級副担任と位置付け、必要な時間には支援員も配置しながら、学びの基本を身につけさせ、小一ギャップの予防に努めた。

### (3) 4年生の少人数指導

昨年度末のNRTの結果から、4年生の算数科の習熟の底上げが学習面では喫緊の課題であった。4年生は昨年度34名の在籍だったことから非常勤講師を配置いただいた。その後2名の転出で現在32名となっている。そこで、OJT支援員の豊富な指導経験を活用すべく、4年生担任との少人数指導を実施した。習熟度別ではなく、無意図で2分割し、同じ学習内容での指導である。

OJT支援員が1年生の副担任でもあることから、算数の時間を毎日3校時目とし、1年生の3校時目の教科は担任一人でも可能な教科を設定し、支援員も配置した。

## 3 成果と課題

### (1) 教育マイスターとしての自覚とOJTの進展

OJTの活性化・充実の核となることを期待して教育マイスターを命課し、県センター及び教育事務所の校外研修にOJT支援員がいることで安心して臨めた。

研修の復命では、OJT活性化の基本は職場の信頼関係づくりであることや、「今までは自分の学級だけ、分掌領域だけにしか目がいかず、同僚性にも欠けることもあった」という反省、「そのために自分をもっとコミュニケーションスキルを高めたい」という自身の振り返り、「OJTを常に意識しながら職務を進めることができるようになった」という記述が見られ、研修への参加が、教育マイスターとしての自覚を促し、資質向上に役立ったと考える。今後ますます中堅教員としての活躍が期待できる。

### (2) 校内研究の推進

本校の校内研究及び授業づくりの進展のめやすとして、2つの数的指標がある。それは、年2回実施の経営評価の一環としての保護者へのアンケート項目である。「お子さんは授業がわかると言っているか？」に対して、H27前期[84.3%]→H27後期[85.9%]→H28前期[84.3%]→H28後期[92.6%]と4段階評価(ABCD)の肯定的評価(A・B)は高まっている。また、「個に応じてきめ細かに指導・支援しているか」は、H27前期[60.6%]→H27後期[67.9%]→H28前期[75.0%]→H28後期[68.8%]の結果であった。ユニバーサル・デザイン(UD)の考え方にに基づき、習得と活用、探究の学習のねらいを明確にし、学習課題の吟味と学習内容の焦点化・視覚化等を工夫しながら、毎回の成果を「大堀小スタンダード」として記録・整理・蓄積し、日々の授業実践の中で活かしていくという基本姿勢を今後も堅持していきたい。

### (3) 1年生の円滑な適応

教育マイスターの担任とOJT支援員のペアで、課題の多い1年生を指導できたことで、2人の指導力が相乗的に作用し、小学校生活の習慣形成と学びの導入が円滑に進み、多少の支援は必要であるが、順調に適応し、外部の評価も高い。指導経験豊富なベテランをOJT支援員として配置いただいた点がとても大きい。

### (4) 4年生の学習意欲の向上

算数は、習得に個人差が生じやすいことから、意欲を失ったり算数がきらいになってしまう場合もある教科である。しかし、少人数での授業になったことから、子どもたちからは「分からない」という声を出しやすく、つまづきを丁寧に教えてもらえると大変好評である。4年生に限定した評価指数(2満点)でみると、児童アンケートの「わかるように教えてくれるか？」では、H27後期[1.7]→H28後期[1.9]に、保護者アンケートの「お子さんは授業がわかると言っているか？」では、H27後期[0.8]→H28後期[1.1]にそれぞれ上昇している。4年生の普段の授業の様子やアンケート結果をみる限り、意欲と成績の両面で手応えを感じている。



**教育マイスター制度 中学校：マイスター型**  
**「探究型学習」授業による主体的に学ぶ生徒の育成**  
**寒河江市立陵西中学校**

## 1 本校の状況

### (1) 学校の実態

本校は、各学年2学級と特別支援学級2学級の全校生173名の学校である。指導者側としては、各教科1～2名での指導であるため、教科の専門的な話し合いを行うことが難しいということがある一方、違う教科の立場から新鮮な目で生徒の姿や指導の仕方を見合えることができるという利点がある。

### (2) 本事業の運用のねらい

本校の研究主題『豊かなかかわりの中で、自ら学ぶ生徒の育成』の実現のために、『授業改善』および『効果的な事後研のあり方』を柱として研究を進めている。

『授業改善』に関しては、取り組んでいくうえで課題となったことが2つあった。1つは、主体的、対話的な深い学びを保障するための時間の確保である。もう1つは協働的な学びを実現するために必要な、生徒一人ひとりに考えや見通しを持たせることへの手立てである。この2つの課題を解決するために本校では、「授業の中心課題に直結する家庭学習課題」を予習として与え、学習指導に当たることにした。

『効果的な事後研のあり方』に関しては、「探究型学習授業とはどういうものか」という疑問の声を受け、他校の授業研への参加を促し、学んだことを「研究推進だより」を通して全体で共有することに加えて、校内で行われる授業研究会の事後研を2部制とし、Ⅰ部は「探究型学習を取り入れた提案授業について話し合う場」、Ⅱ部は「探究型学習について理解を深める場、及び具体的実践（動き）を考える場」にし、事後研を行った。

以上、本校の実態と課題から、教育マイスターを『予習的家庭学習を活かした授業づくり』と『事後研2部制』に取り組むための推進役とし、実践にあたってきた。

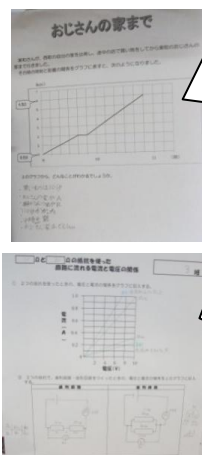
## 2 実践の内容

### (1) 予習的家庭学習を活かした授業づくり

仲間との協働学習で深い学びを実現させるために、本時の課題に迫る予習的課題を家庭学習として与え、授業につなげていくことにした。

どの教科も単元の中に、意図的・計画的に予習的課題を入れ、学びの活性化につながるように努めた。

主な実践として国語科の『紹介文を書こう』では生徒自身が選んだ本についての紹介文を家庭で書かせ、授業では時間をたっぷりを使いながら仲間との協働の学びを通してより良い文章に仕上げた。また、音楽科の『帰れソレントへ』では、作曲者の思いや歌詞からイメージする情景を思い浮かべ、家庭で強弱記号を入れてきた楽譜をもとに、授業では表現の仕方の交流を通して、より良い歌い方につなげていった。さらに、道徳では、生徒の考えの交流をより深いものにする手立てとして、資料を事前に読ませることだけでなく主発問も提示し、考えをまとめてくるところまでを家庭学習とし、本時で考えるべき道徳的価値についての議論を十分に行った。



**数学科『一次関数』**  
予習課題として、「グラフから読み取れること」を挙げてくる。本時では、提示する関数の難易度を上げ、グラフの見方考え方を養う。

**理科『合成抵抗』**  
予習課題として、2つの抵抗それぞれの電流と電圧の大きさの関係のグラフを用いて、直列や並列の回路における合成抵抗の大きさを考えてくる。

## (2) 事後研 2 部制

事後研のⅡ部は、「探究型学習」について考えを深め、すぐに実践につなげる時間とした。

1 回目は年度初めの研修会ということで「探究型学習」を行う上での課題を、

学年ごとに洗い出し、指導事項の確認を行った。5月下旬での研修であったため、各学年とも指導すべきことが見えてきたところであった。

2 回目は、「探究型学習」を取り入れた授業づくりで大事だと思うことを出し合い、探究型学習のイメージづくりと考え方の統一を図ることを目的に研修を行った。

3 回目は、実際に取り組んでみての成果と課題を教師側と生徒側の2つの側面から洗い出し、成果については「どんな取組を行ったことが有効だったか」を情報交換し、課題については「解決のためにどう取り組んでいけばいいのか」といった考えを出し合い、明日からの授業および次年度につなげることとした。



## 3 成果と課題

### (1) 成果

①生徒に対して行った学習アンケートでは「先生たちがわかりやすく教えようとしていると感じる」に対して、95%の生徒が「そう思う」と答えており、授業改善に取り組んでいることを生徒も感じている。また、「授業はわかりやすい」「学校で学ぶことは楽しい」と答える生徒も90%おり、主体的に授業に取り組んでいることもうかがえる。



②予習的課題を与え、事前に考えをもって授業に臨むことにより、考えを交流したり、思考したりする時間が確保でき、生徒主体の協働的な学びのある授業が多くみられるようになった。

③教師側の成果として、予習的家庭学習課題を考えることを通して、これまで以上に単元計画を吟味するようになり、「探究型学習」による深い学びの実現に結びつく実践が増えてきた。

④この制度を受け、教育マイスターは学級担任外となり、空き時間を多く設けられた。その結果、TTとして授業に参加したり、他の教諭の日々の授業を多く参観したりした。また、事前研にも入り、授業を作り上げていく段階から関わるようにした。参観によって気づいた先生方の優れた実践を「研究推進だより」で知らせ、日々の授業につながる事後研を行うことで研究が活性化し、年間を通じて授業改善への意識が持続でき、効果的指導に結びついた。

### (2) 課題

①家庭学習課題と連動させた授業づくりが年間を通してできたかどうかについては、意識の向上は見られたもののまだ十分に取り入れているとはいえず、「予習的家庭学習課題」と「本時の学習課題」のさらなる吟味を行い、日常的な授業実践につなげていかなければならない。

②「生徒の家庭学習への取組の甘さ」への対応や「生徒が家庭学習に使える時間には限りがあること」を考えて、確実な定着のための質の高い復習的家庭学習課題の与え方等を、今後検討していく必要がある。

**教育マイスター制度 中学校：マイスター型**  
**日常的な校内OJTの推進を図り、授業改善につなげる取組**  
**飯豊町立飯豊中学校**

## 1 本校の状況

### (1) 学校の実態

本校は、各学年2学級の学校規模である。「日々明朗 日々努力」を校是として、生徒たちは「あいさつ」「歌声」「清掃」「ボランティア」を4つの柱とした生徒会活動に積極的に取り組んでいる。

学習については「主体的に学習に臨み、自分を鍛える生徒の育成～意欲を持続し、定着をはかる指導の工夫を通して～」を学校研究の主題として、生徒の学習意欲をいかに高めるか、いかに基礎学力の定着を図るかに重点を置いて授業改善に取り組んできた。また、『担任力』を育む学校を目指し、細やかな生徒理解を基盤とした授業の改善（『山形教育』No.368に掲載）にも取り組んできた。

これまでの取組から、生徒の実態として、基礎学力の定着がみられる半面、学習に対して受け身な生徒も多く、根拠や理由を説明したり、既習事項を活用して課題を解決するような学習に消極的な姿勢を示したりする面もみられる。このような課題の改善に向け、更なる授業改善に取り組んでいる。

### (2) 本事業の運用のねらい

(1)で述べたような生徒の実態に対して、学校研究を中核にし、各教員が日常的な実践の目標を掲げて授業改善を図っている。しかし、本校では各教科の指導担当教員が2名または1名であり、担当時間（時間割）の都合からも、同一教科間で授業改善の助言を行うことは困難である。そのため、日常的な授業改善の取組については各教員に委ねている面が大きい。

本事業を通して、校内OJTの一層の活性化を図り、日常的な授業改善が推進されることが運用の目的である。

## 2 実践の内容

### (1) 校内研修の活性化

□教育マイスターの各研修を通して学んだことや、他校の実践の伝達を通して、学校研究の推進を図る。

教育マイスターを学校研究の推進委員の一員に加え、ベーシック研修や視察研修等で学んだことが伝達できる体制をとった。それにより、研究推進委員会の協議の際に「探究型学習」を含めた実践例などが紹介され、本校の研究の推進が図られた。

□校内研修において、「探究型学習」について教職員が学ぶ機会を設け、授業改善につなげる。

学校研究（授業研究会）とは別に、生徒の学習に関する校内研修会を実施した。特に「探究型学習」については、置賜教育事務所から指導主事を招聘し、その意義や大切にすべき要素などについて示唆をいただいた。併せて具体的な取組例（授業例）も紹介していただき、「探究型学習」についての本校職員の理解を深めるとともに、具体的な実践の在り方について考える契機とすることができた。

## (2) 校内OJTの推進

### □校内研修を通して、OJTの推進を図る。

2(1)の取組を通して、校内OJTの推進を図った。特に学校研究に関して、授業研究会の事後研究会の持ち方を工夫した。従来、本校の事後研究会ではグループごとのバズ・セッションの方式により、各教員が視点に沿って自由に発言できるようにしている。そのグルーピングに際して、同年代の教員を集めて若手教員も発言しやすくしたり、逆に年代が偏らないようにグループをつくり、協議の中で幅広い年代からの意見が出せるようにしたりした。それにより、事後研究会の話し合いが一層活発になり、互いの考えに学ぼうとする姿勢も高まった。

また、他の研修についても、研修会後にもその内容が職員室内で話題とされることが増え、授業改善の一助となったと考えている。

### □教育マイスターの働きかけにより、日常的なOJTの推進を図る。

教員同士が日常的に互いの授業を参観することや、じっくりと授業について語り合う時間はもちにくい状況にある。そのため、教育マイスターが率先して授業を参観し、指導技術などにおいて学ぶべきことを伝えることを計画した。しかし、授業の受け持ち時数の都合等により、計画を充分に進めることが困難であった。

また、全職員が集まり授業等について語り合う機会を設けることは容易ではないため、教頭と相談の上、若手教員と有志による先輩教員との座談会を開催した。先輩教員が授業づくりで大切にしていることや、これまでの先輩方から学んできたことなどを教わる場を持つことができた。来年度は定期的な開催を計画したいと考えている。

## 3 成果と課題

### (1) 成果

#### □他校の実践に学ぶ

校内研修の機会だけでなく、教育マイスターの各研修後に、その内容や実践について職員室内で話題とされる機会が多く見られた。特に他校の実践に対しては、多くの教員が関心を寄せて話をする様子が見られ、個々の授業改善の視点として活かされている。

#### □校内研修の活性化

学校研究や各校内研修において、「探究型学習」を含めた生徒の学びについて話し合われる機会が、これまでより多くなった。また、全体研修をきっかけとして、職員室内でも授業についての話題が増え、それを刺激として授業改善の意識が高まったと感じている。

### (2) 課題

#### □教育マイスター制度の活用について

本事業の趣旨について、年度はじめに十分に理解した上で実践が開始されたとは必ずしも言えない面がある。任命された教育マイスターが研修を重ねる中で、ようやく事業の趣旨並びに期待される具体的な取組を理解するに至った。そのため、本事業を十分に機能させられるような校内体制がとれなかったことは反省点である。併せて、すでに決定している学校の教育課程の計画に、本事業に係る校内研修等を新たに設けることは難しかった。教育マイスターの研修の成果を校内研修により効果的に反映させたり、期待される取組を実践したりするためには、体制を整えることも重要であり、年度初めに本事業の趣旨を十分に理解しておくことが必要である。これらの今年度の反省を来年度に活かし実践していく。

# 特別支援学級 学級編制基準の引き下げ 個々の児童に合わせた心理的な安定と学習の保障 鶴岡市立朝陽第四小学校

## 1 本校の状況

### (1) 学校の実態

本校は、通常の学級が各学年3～4クラスあり、全校生565名の学校である。今年度の特別支援学級は、知的障がい（1学級3名）、自閉症・情緒障がい（3学級13名）、計16名が在籍している。

自閉症・情緒障がい特別支援学級の児童は5つの学年にわたっているうえに、交流及び共同学習を行える児童から、集団活動に入ることができない児童など様々な実態である。しかし、各学年の学習内容を理解できる児童が多いので、情緒の安定を図りつつ、学力の定着を目指して取り組んでいるところである。

### (2) 本事業の運用のねらい

本事業を受けて、今年度は自閉症・情緒障がい特別支援学級を「はばたき1組：1年女子1名、3年男子3名、5年男子1名女子1名、計6名」「はばたき2組：4年男子3名女子1名、計4名」「はばたき3組：2年男子3名」と編制した。

知的能力が高い子が多く、該当学年の学習内容を理解できるので、通常の学級と同じペースで学習を進めさせたいと考えた。また、保護者の意向を受けそれぞれの学年の行事にもできるだけ参加させたいと考えた。

そこで、本事業を活用し、多人数で情緒が不安定になりやすい児童がいる2つの学年を単学年の学級にし、通常の学級との交流及び共同学習を行う時も支援しやすい体制を整えることで情緒の安定を図った。また、同じ学年ということで学習進度がそろい、意欲喚起につながると考えた。学年で6名が在籍している学級には支援員配置の時間割を組み、学習や交流及び共同学習がしやすい体制を組んだ。

## 2 実践の内容

### (1) 少人数の中での情緒の安定

自閉症・情緒障がい学級の児童は音や周りの行動に敏感で、少しのことでも気が取られてしまう。少人数で学習することにより、刺激が少なくなり情緒の安定が図れた。はじめは友だちとのかかわり方がわからず、すぐに手を出しトラブルになることが多かったが、毎日生活するうちにお互いの個性がわかり、仲よく会話したり遊んだりする姿が多くなってきた。その児童も自分の居場所を見つけ、自己肯定感が高まってきている。また、母親から離れられない児童に対しては周りの児童が心を配れるようになり、少しずつ離れることができるようになってきている。

他の児童もそれぞれの課題を持って生活しているが、少人数なので保護者と連携をして手厚い支援をしたり、担任団みんなで常に情報交換をし、フォローしあったりすることで情緒の安定を図ってきた。

### (2) 教科学習の保障

単学年の学級では、該当学年と同じ内容を学習することができた。特に4年生では、理科や社会など実験や調べ学習の機会が多いが、担任が一人でしっかりと指導するこ

とができた。同じ学年の児童が複数いることで、発言したり調べたことを発表したりできた。また、苦手な聞き方や話し方、友だちの意見を受けて自分の考えを発表する、友だちの意見を聞いて自分の考えを更新していく等の学習も行うことができた。

複数学年が在る学級でも支援員配置により、それぞれの学年の内容を学習することができた。

### (3) 交流及び共同学習での支援

知的能力が高い児童が多く、将来のことも考えて保護者も担任も可能な限り学年の行事やできる学習には参加させたいと考えている。しかし、多人数の中に入れば突発的にいろいろなことが起こることが予想される。予定していないことが起きるとパニックになる児童が多いので、担任や支援員がついていくことができるのは効果的である。困った時には具体的にどういう行動をしたらよいかすぐその場で支援することができた。何度も体験することで、臨機応変に行動することができるようになってきている。多人数での学習の仕方に慣れたら、徐々に付き添っていく時間を減らしたり教科を増やしたりしている。

## 3 成果と課題

### (1) 単学年の学級

今年度単学年になった2学級は、前年度は同じ教室で学習しており、情緒的に落ち着かない子が多く、学習に集中できず別のことやったり、他の子が気になったり、登校に消極的になったりする子も見られた。今年度本事業で2学級になり、それぞれ単学年になったことで、それぞれの成長もあるが、時間いっぱい学習できるようになった。まだ、情緒的に安定しない子は見られるものの、パニックを起こした時は担任が寄り添ったり、隣の学級担任が支援したりと、協力して支援体制を組むことができた。交流及び共同学習でも、多人数が苦手な子に寄り添って支援することができ、交流できる教科が増えてきた。

### (2) 複数学年の学級

昨年度と同じメンバーに1年生が一人加わった。昨年度までの積み上げがあるので、児童はお互いの個性を理解し、折り合いをつけて生活している。1年生も穏やかな子なので、トラブルもなく生活している。支援員配置により時間割を工夫することで、それぞれの学習を保障することができた。

### (3) 合同の学習

知的障がい特別支援学級も合わせると16名で、指導者は支援員も含めて5名である。合同で学習する時は、一人がMTになり、他の指導者は情緒的に安定しない児童について支援することができた。はじめは支援学級の行事にも参加できなかった児童が、参加できるようになり、発表できるようになり、交流学級にも行けるようになり、と段階を踏んで成長している。学級編制基準が引き下げられたことによりきめ細やかに手厚い支援ができるようになったからだと考えられる。今後も進路を見通しつつ、個々にあった支援を協力して行っていきたい。

# 別室学習指導員 不登校生徒の教室復帰に向けた取組 鶴岡市立鶴岡第一中学校

## 1 本校の状況

### (1) 学校の実態

本校は1学年7学級，2学年7学級，3学年7学級，特別支援学級2学級（知的障がい1学級，情緒障がい1学級）合計23学級全校生徒数619名で鶴岡市では一番の大規模校である。県費負担教職員は44名である。その他に県から別室学習指導員1名，スクールカウンセラー1名，教育相談員1名，加えて鶴岡市から教育支援員1名の配置を受けている。学校教育目標である「自立」を具現化するために，「主体的な学び合い」を研究主題に掲げてアクティブラーニングの研究と実践を行っている。

不登校生徒の現状を見ると，一日も学校に登校していない生徒もいるが，遅れて登校したり，登校しても保健室や教育相談室等の別室で過ごしていたり，それぞれ状況が異なり，また原因も個々に違うなど，それぞれに対応した指導が求められている。

### (2) 本事業の運用のねらい

本校では不登校生徒及び不登校傾向の生徒に対応する為に，保健室での対応，教育相談室での対応を連携して行っている。また，最近増加しているスマートフォンなどのネット依存，ゲーム依存などによって昼夜逆転した生活を送っている生徒の立て直しを図る為に，医療機関や児童相談所などの外部機関との連携も行っている。本事業を通して次のような成果があると考えられる。

- ① 互いに連携した対応を行うことで，それぞれの生徒の状況に応じた指導を行うことができる。
- ② 教育相談室で学習を支援していく中で，学習に対しての自信が持てるようになり教室復帰に近づくことができる。
- ③ 様々な大人が関わり合う中で，信頼関係を構築できるとともに相談しやすい環境づくりを行うことができる。

### (3) 別室登校生徒の状況

現在常時保健室登校をしている生徒は3名，教育相談室登校している生徒は2名いる。その他に夕方や昼過ぎに保健室に少しの間だけ登校する生徒がいる。

別室登校の要因は様々であるが，最近ではゲームを長時間やることによる生活リズムの乱れもあると考える。

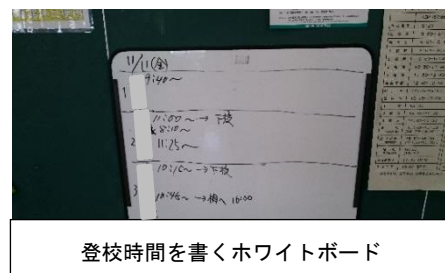
## 2 実践の内容

### (1) 校内体制

- ① 常時勤務している養護教諭と市の教育支援員，別室学習指導員の他，週1回勤務している県の教育相談員，スクールカウンセラーが教室復帰に向け連携している。
- ② 学校だけでは解決できない問題については教頭が窓口となり外部機関との連携を図ると共に教職員との連携については特別支援コーディネーターがつなぎながら，組織として対応し担任だけが抱え込まない体制を構築している。
- ③ 週1回の企画委員会において不登校生徒の状況の確認。また，月1回適応指導委員会を開催し，今後の支援のあり方について情報交換している。

## (2) 相談室の活用を通して

- ・登校すると同時に職員室のホワイトボードに登校した時間と名前を本人が記入し学年の先生へ挨拶に行く。これにより誰が、何時に登校しているのかを教職員も知ることができる。職員室の雰囲気にも慣れさせていくこともできる。
- ・その日の学習プログラムを立て、自分のペースで学習を行いながら学習指導員が支援するのを基本とするが、週1回勤務する教育相談員も関わりながら対応をしている。
- ・学習に集中できないときは、保健室や図書室を居場所にするなど柔軟に対応する。
- ・その日の状況について担任に知らせ、生徒の学校での様子を把握し家庭に知らせることで、保護者も安心感を持つことができる。



## (3) チームとしての相互連携と情報交換

- ・不登校生徒及び不登校傾向にある生徒もあわせると20名近い生徒がおり、一人ひとりの状況に対応する為には、職員も組織として対応していく事が求められている。その為の不登校状態の生徒については、教育相談員、スクールカウンセラー、担任が分担して家庭訪問を行っている。
- ・保健室に登校している生徒で学習に向かえない生徒については、養護教諭、支援員が関わりながら、学年の先生と決めた約束（個々で違う）を守るように促している。また、定期的にスクールカウンセラーによるカウンセリングで、心のケアを行っている。
- ・学習への意欲が見られてきた場合には、次のステップとして教育相談室への登校を促し、学習指導員による学習の支援が受けられるようにしている。
- ・毎時間分担して職員が校内巡視を行い、保健室の様子や教育相談室での状況を観察し記録していくことにより状況を把握できるようにしている。
- ・給食の時間や放課後にその日の状況を養護教諭がコーディネーターや学年に伝え、生徒の様子を知るように努めている。

## 3 成果と課題

### (1) 成果

- ・学校に配属されている関係職員、教員が連携を深めることにより、一人が抱え込まない体制づくりが構築できると共に、生徒が学校での居場所を確保することができている。これによりずっと教育相談室登校をしていた生徒1名が2学期から教室復帰することができた。教育相談室で学習を積み重ねながら、自信を深めていったと思われる。このように教職員がチームとして役割分担ができたのも今回の人員の配置があったからだと考える。
- ・多くの大人が関わることで、家族に見守られている安心感が生まれ、生徒自身のコミュニケーション能力の育成にもつながっていると考える。教員だけの関わりだけでは限界があり、今後も役割分担をしながら支援していく必要があると考える。

### (2) 課題

- ・ゲームによる生活リズムの乱れが、学校生活にも影響を及ぼしている。今後この点についても連携を図りながら取り組んでいきたいと考える。